

皮膚科

a. 体制

2021年度は5名体制で診療を行った。詳細は以下の如くである。

主任部長：

吉川義顕（京大 1991年卒、 2017年4月から当院勤務）

副部長：

古賀玲子（岐阜大 2003年卒、 2010年1月から当院勤務）

医員：

山上優奈（大阪医大 2010年卒、 2017年1月から当院勤務）

レジデント：

石橋茉実（京大 2018年卒、 2020年6月から当院勤務）

衣斐菜々（琉球大 2019年卒、 2021年4月から当院勤務）

b. 診療実績

外来の診療体制は前年度までと同様に、月曜日から金曜日までは午前3診、午後2診とし、水曜日の午後には外来手術枠を設け、土曜は隔週午前1診（第2・4週は休診）で診療している。

診療方針としては、原則として主たる疾患群に関してはガイドラインに準拠した診療を心掛け、いわゆるEBMに根拠をおいた標準化された治療を行うよう努めている。

外来診療および入院診療における傾向としては、コロナ禍以前（2019年度）と比較し、それ以降（2020年度、2021年度）では延外来患者数、初診患者数、紹介患者数はすべて減少し、入院診療においても、1日あたりの在院患者数、新入院患者数ともに減少している。さらに、2020年度と比較しても、今年度（2021年度）はすべての実績においてさらに減少傾向である（表：2019、2020年度との比較）。

具体的な診療内容としては、まず近年の皮膚科診療における大きな特徴として、乾癬、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹という主要な皮膚疾患において生物学的製剤の使用が標準化されてきたことが挙げられる。生物学的製剤は使用できる施設に制限が設けられているが、当科は使用が許可された施設でもあるうえに、すべてのスタッフが十分なトレーニングを受けているので、地域の医療機関とも積極的に連携しつつ、適切に生物学的製剤の導入および使用を行うことが出来ている。

乾癬の診療には特に重点を置いており、外用療法、内服療法、光線療法（ナローバンドUVB、エキシマライト）、そして生物学的製剤を用いた治療を患者様の症状や重症度、ライフスタイルなどを総合的に検討したうえで選択している。2022年3月時点で56例（前年度は46例）に対し生物学的製剤を使用中で

ある。

アトピー性皮膚炎の治療の基本は外用療法であり、当科の診療においても外用指導を丁寧に行うことを徹底しており、外用指導を含めた教育入院も行っている。その他の治療選択肢として光線治療や免疫抑制薬の内服治療も行っているが、このような既存治療では効果が不十分である場合には生物学的製剤を用いて治療している。2022年3月時点で45例（前年度は33例）に対し生物学的製剤を投与中であり、アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤の使用症例数も増加傾向にある。また、JAK阻害内服薬の使用も徐々に増えつつある。

特発性慢性蕁麻疹に関しては、2022年3月時点で19例（前年度は11例）に対し生物学的製剤を使用中である。

その他の疾患として、当科は円形脱毛症に関しても積極的に診療に取り組んでおり、ステロイドパルス療法、ステロイド局所注射、局所免疫療法、光線療法、内服療法、外用療法などを組み合わせて治療している。基本的な治療方針としては、急性期で広範囲の場合には入院のうえでステロイドパルス療法を行っており、今年度は7例（前年度8例）の入院があった。慢性期の難治性で広範囲の脱毛症では局所免疫療法（SADBEを使用）を選択することが多い。皮膚の良性および悪性腫瘍の治療に関しては、当院形成外科と協力しながら最適な治療を選択するようにしている。保険外診療としては、男性型脱毛症治療、陥入爪に対する金属ワイヤー法を実施している。

入院患者の疾患内訳としては、細菌あるいはウイルス感染症が例年同様もっとも多く、その他には、湿疹・皮膚炎群、蕁麻疹、薬疹、水疱症、皮膚潰瘍、円形脱毛症などが入院の対象となっている。具体的な入院患者数は、蜂窩織炎・丹毒などの細菌感染症は38例（前年度36例）、帯状疱疹は25例（前年度40例）、円形脱毛症は7例、水疱症は5例、薬疹は3例であった。

他職種とのチーム医療については、看護師専門外来であるフットケア外来と連携を図り、皮膚潰瘍や爪囲炎の発症予防に努めている。また、毎週木曜日の午後には皮膚科医師の他に、看護師、理学/作業療法士、管理栄養士、薬剤師、事務職を交えた多職種での院内の褥瘡回診を実施し褥瘡発生率減少と褥瘡予防の啓発に向け活動している（褥瘡回診は、地域および院内の新型コロナウイルスの感染状況によっては中止あるいは参加職種を限定して実施している）。

皮膚科は他の診療科との関わりが多く、さらに処置も多い診療科であるため、他の診療科の医師や、看護師、事務職などを含めたメディカルスタッフとのコミュニケーションを大切にし、円滑な診療のもとで患者様に最適な医療を提供することを常に心掛けている。

（表：2019、2020年度との比較）

	延外来患者数	初診患者数	紹介患者数	1日あたり 在院患者数	新入院患者数
2019年度	18,160	3,296	517	4.1	154
2020年度	15,634	2,743	415	3.1	105
2021年度	15,301	2,678	313	2.1	90

c. 学会・講演・著作その他の研究活動

【学会】

- 1 衣斐菜々、石橋茉実、山上優奈、一ノ名晶美、古賀玲子、吉川義頭、長谷部雅士、濱崎暁洋
色素性痒疹の2例 第114回 近畿皮膚科集談会 2021/7/11 (京都)
- 2 衣斐菜々、石橋茉実、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
色素性扁平苔癬の1例
第72回 日本皮膚科学会中部支部学術大会 2021/11/20-21 (奈良)
- 3 Mami Ishibashi, Tomohiro Oiwa, Takashi Nomura, Yoshiaki Yoshikawa, Hironori Niizeki, Kenji Kabashima
Role of Prostaglandin E-major Urinary Metabolite Levels in Identifying The Phenotype of Pachydermoperiostosis 50th European Society for Dermatological Research (ESDR) annual meeting 2021/9/22-25 (Web)
- 4 石橋茉実、衣斐菜々、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭、金友仁成
両足底の結節を主訴に来院した持久性隆起性紅斑の1例
第473回 京滋地方会 2021/12/18 (京都)
- 5 衣斐菜々、石橋茉実、山上優奈、古賀玲子、吉川義頭
両下腿の紫斑が受診契機となり診断に至った静脈血栓塞栓症の1例
第489回 日本皮膚科学会大阪地方会 2022/2/5 (Web)

【論文】

(症例報告)

- 1 Ishibashi M, ..., Nomura T*, Yoshikawa Y, ..., Kabashima K.
Role of Prostaglandin E-Major Urinary Metabolite Levels in Identifying the Phenotype of Pachydermoperiostosis.
Journal of Investigative Dermatology. 2021 Dec;141(12): 2973-2975. (査読有り)
- 2 足立英理子*, 山上優奈、一ノ名晶美、古賀玲子、島 香織、丸毛 聡、吉川義頭
ループス腎炎の治療中に発症した *Mycobacterium kansasii* 感染症の1例
皮膚臨床 2021 63巻 p1062-1066 (査読有り)
- 3 Ishibashi M*, Koga R, Adachi E, Yamagami Y, Ichinona M, Yoshikawa Y.
Psoriasis in an Asian patient with atopic dermatitis treated with dupilumab.
Trends Immunother. 2021 5(1):18-20. (査読有り)

【研究】

- 1 乾癬における生物学的製剤を基盤とした集学的治療の有用性評価に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、石橋茉実)
- 2 円形脱毛症における標準的治療の最適な介入時期とアウトカムに関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、石橋茉実)

- 3 蕁麻疹の標準的治療と臨床的効果に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、石橋茉実)
- 4 アトピー性皮膚炎における標準的治療の有効性の臨床的評価方法に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、石橋茉実)

【出版】

- 1 吉川義頭
古典的外用薬（基礎膏） 今日の皮膚疾患治療指針 第5版 p248-250 2022 医学書院
- 2 吉川義頭
その他の外用薬 今日の皮膚疾患治療指針 第5版 p250-252 2022 医学書院